

健康まちづくりに向けた市民グループ活動における健康と環境のテーマ融合性

北詰 恵一¹

¹正会員 関西大学教授 環境都市工学部都市システム工学科

(〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番35号)

E-mail:kitazume@kansai-u.ac.jp

健康まちづくりは、行政、医療・保健関係者等だけでなく、市民によっても行われるべきものであり、市民の自律的役割が期待されている。本研究は、大阪府内の吹田操車場跡地まちづくりをきっかけとした「健康・医療まちづくり市民グループ」を結成し、健康と環境に関心のあるメンバーを含む勉強会を実施した。この結果、①当該地域における地縁型組織と健康・医療についての志縁型組織が混在していても両者の見解が前向きなものに変化していくこと、②環境テーマメンバーから環境に特化した発言がなされても、議論の中で融合テーマへと展開していく可能性が見いだせること、③必ずしも地域性とは繋がっていないメンバーが地域課題をベースにした具体的な議論へと展開することなどがわかった。

Key Words : *healthy city, eco city, public interest in activities,*

1. はじめに

健康まちづくりは、行政、医療・保健関係者等だけでなく、市民によっても行われるべきものである。健康というテーマは、他のテーマと比較しても、市民ひとりひとりにとって関心が高く、また、今後もその傾向は続くものと考えられる。厚生労働省の調査においても、個人が感じる幸福感を考えると最も重視した事項を「健康状況」とした回答者が54.6%に上り最大の比率であった。このような高い関心を背景に、市民の力によるまちづくりが必要となる。そして、エリアマネジメント組織やまちづくり協議会のような主体グループによって行われる場合でも、市民の自律的役割が期待されている。

また、健康をテーマとしたまちづくりであっても、「歩いて楽しい」、「無理なく続けられる運動」などといったコンセプトで進められるとき、取り巻く環境に関心が向けられることとなる。同調査においても、今後、健康のために気をつけたいことのうち、「運動やスポーツをするようにしたい」とする回答者が51.4%あり、基本的な運動である「歩く」ことやスポーツへの開始および継続への意向は高い。一方で、環境をテーマとした場合、地球環境、様々な汚染問題のほか、交通問題や緑化などの身近な生活上の環境対策などを中心とすることが多い。このとき、必ずしも、健康というテーマを直接関

連づけているとは限らない場合が多い。

健康と環境は、市民活動の中でも主要な活動領域である。両領域は密接に関連しており、相乗効果も期待できる。しかしながら、それぞれの分野から立ち上がってきた市民活動は、必ずしも融合しておらず、十分な連携を実現していない。本研究は、健康と環境の両テーマを掲げる地域事業を例にとりあげ、そこに関わる市民の意向を市民グループ活動における勉強会での発言に求め、健康面からアプローチしてきた市民と環境面からアプローチしてきた市民が、どのように関係性を変化させていくかを見ることで、この両領域の関連強化、相乗効果が期待できる方向性を明らかにすることを目的とする。これによって、自律的な市民活動からの環境に配慮した健康まちづくりの実現に向けた取組みが期待できるものと考えている。

2. 吹田操車場跡地のまちづくりについて

(1) 概要

本研究における健康と環境の両テーマを掲げる地域事例のケーススタディとして現在大阪府吹田市が主体となって進めている吹田操車場跡地のまちづくりを選んだ。このまちづくりは、吹田市内にあるJR岸辺駅前操車場跡

地の約半分の吹田市・摂津市をまたぐ領域を敷地とし、「北大阪健康医療都市」(Northern Osaka Health and Biomedical Innovation Town (NohBIT))と呼ばれて、平成30年度(2018年度)に国立循環器病研究センターと吹田市民病院が操車場跡地に移転が予定されているものである。図-1に示すように、現在、これら2つの病院の移転のほかに駅前複合商業施設、健康増進広場の建設、イノベーションパークの検討等が進められている²⁾。この健康・医療のまちづくり事業は吹田市などが主体となって進めており、住民がまちづくりに自立的に参画している様子はほとんど見られないのが現状である。

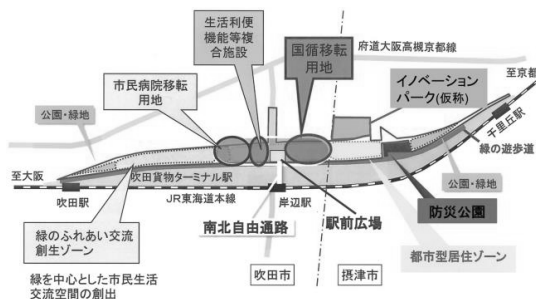


図-1 吹田操車場跡地の全体ゾーニング図 (吹田市HPより)

(2) 対象事業の健康側面と環境側面

本事業における健康まちづくりとしての側面は、両病院の立地をきっかけとした健やかなくらしと質の高い福祉を求める声に支えられた事業となることである。図-1中の「緑のふれあい交流創生ゾーン」における健康広場は健康増進のためのさまざまな装置やしかりけについて議論されており、また、同敷地と吹田貨物ターミナル駅を中心としたJRのエリアとの境界部分には幅12m、長さ3kmの遊歩道が整備されている。2つの病院の活動の中心はあくまで医療であり周辺地域へのいわゆるしみだすような効果が期待できるかどうかはこれからの課題となるが、両病院をきっかけとした健康まちづくりへの指向は観察されている。

一方で、本事業における環境としての側面は、低炭素まちづくり計画に基づく事業である。吹田市は、「吹田操車場跡地地区低炭素まちづくり計画」(エコまち計画)を2015年3月に発表している³⁾。都市機能集約、低炭素交通手段、緑地保全・緑化、エネルギー効率化、建築物の低炭素化などが議論されており、特に緑地保全・緑化などには市民の参画が期待されている。

3. 市民グループの結成と経緯

著者らは、この吹田操車場跡地まちづくりをきっかけ

とした「健康・医療まちづくり市民グループ」を結成し、勉強会を開始した。呼びかけ先は、吹田市民立市民公益活動センター「ラコルタ」が発行する市民公益活動団体の活動内容紹介冊子『吹田市ボランティアグループ・NPOガイドブック平成25年(2013年)度版』の中で、「保健・医療又は福祉の増進」分野で活躍されている団体、吹田操車場跡地がある岸边に関わりのある団体を対象としており、当初は健康をテーマとする団体を含まなかった。

表-1 市民グループ活動の開催実績

| 回数 | 日時 | 参加人数 |
|-----|-------------|----------|
| 第1回 | 平成26年12月17日 | 19名 |
| 第2回 | 平成27年1月23日 | 共催につき人数別 |
| 第3回 | 平成27年5月26日 | 11名 |
| 第4回 | 平成27年6月18日 | 16名 |
| 第5回 | 平成27年8月28日 | 15名 |

表-1は、その開催実績である。本研究会は、平成30年度に予定されているまちびらきまでではなく、その先の事業が進んでいく時期に至っても、組織形態はどのようなものであれ継続する予定であるが、現段階では、およそ2か月に1回程度で計5回開催している。おおむね10～19名の参加を得ており、活発な議論が交わされている。

その中で、前述のとおり、当初は健康や医療をテーマとしたNPOおよびボランティア団体のメンバーを中心に始めたものの、比較的早い段階からメンバーの議論をきっかけに環境をテーマとした活動を行う市民への参加呼びかけが進められ、現在では、双方のテーマ活動者が共存する形で進められている。

本市民グループの狙いは、吹田操車場跡地まちづくりのような大きな事業に導入が期待されるエリアマネジメントの担い手として、行政や企業、医療関係者、デベロッパーといった影響力の大きな主体が参画する場面において、市民として十分な発言力を持つほどに実力をつけることとしている。そのために、地域の状況、まちづくりの手法、事業の方法などを学ぶことが必要であるとの認識にたっており、その勉強会であると考えている。

また、市民グループの当面の目標を次のように置いた。すなわち、当該プロジェクトの地区を中心としたまちを

- ・住まい、訪れる人が健康を実感し
- ・健康な生活スタイルを自ら提案し
- ・健康のための取り組みを考える

まちにするための発言力の高い市民となる、である。

この目標は、当初メンバーを意識して、「健康」をキーワードとしたもので構成している。市民の自律性を促す意図で設定し、市への要望団体ではなく、市民ができることに中心を置いたものとした。

4. 議論の経緯からみた展開

(1) 分析の方法と議論の経緯

市民グループにおける健康と環境のテーマ融合性を知るために、この勉強会の議論を議事録に沿って追いかけることで分析する。

表-2 第1回会議の議論の概要

- ① グループの進め方について
 - ・このグループ活動の具体的な目指す方向とは何か。
 - ・本当に、住民の自立性は求められているのか。
 - ・住民参加の成果を提案する相手はどこを意識しているのか。
 - ・この市民グループの活動場所があることが大事。
 - ・より幅広い人々に声をかけるべきであり、摂津市民や教育機関との連携を模索すべき。また、環境分野の市民にも声をかける必要がある。さらに、活動をより実効性のあるものにするため、企業を巻き込み、関係者も巻き込む視野にいれるべき。
- ② 地域の状況、参考事例について
 - ・国立循環器病研究センター、吹田市各部署ともに、まだ具体的な説明をいただける段階にない。また、運営面で誰が権限を持つことになるのか、運営内容の情報が欲しい。
 - ・周辺道路、アクセス道路の状況を詳しく知りたい。
 - ・周辺に多くのマンションが建設予定であり、人口構成、商業施設分布、開業医の状況などの変化を踏まえる必要がある。新住民をどう巻き込んでいくか。
- ③ 議論・提案に向けて
 - ・予防、治療、終末医療などに分けて提案を考えるべき。
 - ・病院には、市民を迎え入れるようなスペースがないとボランティアは成長しない。現状、病院内にボランティア室があるが、よりオープンなものを求めたい。
 - ・遊歩道の問題はすでに議論した実績があるが、市には必ずしも受け入れられていない。アプローチの仕方を変えていく必要がある。

表-2は、第1回会議の議論の概要である。主に、研究グループの進め方、地域の状況や参考となる事例、議論・提案に向けての議論が行われた。この中で、参加メンバーとして幅広く声をかけていくべきであるとの指摘があり、当初は隣接自治体や他組織への拡大を想定した発言が相次いだ。その中で、緑化プロジェクトや緑地保全に関する議論があったことから、環境分野の活動をする市民への声掛けが提案された。

表-3は、第3回会議の議論の概要である。第3回会議では、第1回会議の指摘を受け、同じ名簿から環境をテーマとするNPO、ボランティア団体に声をかけ、出席を得た。このため、健康に対する議論のほか、みどりのまちづくりに関する議論ができた。しかしながら、基本的

には、緑化や緑地保全およびその地域的な発展など、環境に関わる立場からの議論に終始したということができた。健康に関わる議論と環境に関わる議論は、時間的にも分けて行われたものになり、互いが融合するにまでは至らなかった。

表-3 第3回会議の議論の概要

- ① 予防医療と市民の健康
 - ・地元地域の市民は何年も前から取り組んでいる。色々な提案も金銭面で進まなくなっており、企業と連携してみようかと考えている。
 - ・高齢者や認知症の人に対して、地域の人はどう動くか。地域の人がいづれでもだれでも健康管理できるしくみが期待される。
 - ・吹田市を長期のスパンで考えたモデル都市にするべきではないか。長期的なので若者に享受できる目標にすべきである。また、全国のモデル都市として発信できるような大きな目標を共有するべきである。
 - ・病院は治療の場なので、健康を促進していくための場やグループを作るべきである。
- ② エリアマネジメントと他主体との関係
 - ・市民の定義を考えた方がよい。ここで考える市民と行政が考える市民は異なるのではないか。
 - ・エリアを起爆剤として、どんなまちづくりをしていくべきか。そのためのエリアマネジメントを考えていくべき。
- ③ みどりのまちづくり
 - ・市民病院や国立循環器病研究センターの近くでは、20～30年先にでも緑の立地の拠点にしていけるべきなのではないか。木を寄附・記念植樹などの取り組みも考えられる。
 - ・北摂の山のような緑を吹田操車場跡地にも取り入れられないか。

表-4は、第5回会議の議論の概要である。第4回は、環境をテーマとした議論とは異なる議題であったのでここでは紹介しない。環境をテーマにする市民から、「歩く」というキーワードに基づいて、緑道整備や公園利用といった健康というテーマとの融合意見が見られるようになった。

(2) 地縁型組織メンバーと志縁型組織メンバー

当該地においてこのような大規模事業が展開される場合、事業の対象が広域であったとしても、地元地域との関係性を重視することは重要である。地元地域において代表的な役割を担うのが当該地区の連合自治会であり、そこに含まれる自治会である。本勉強会でも地元自治会メンバーが参加しており、これまでの地域活動について意見を述べる機会が多く、その中で、必ずしもその意見

表-4 第5回会議の議論の概要

- ① 歩くことの効果と緑道整備・公園利用
- ・市民レベルでの健康寿命の増進に効果がある最も一般的な行動は、「歩く」ことである。
 - ・楽しく「歩き」続けられる工夫として健康増進広場や緑の遊歩道がある。地元地域として、その使い方や環境整備について市や病院に意見を言い続けてきたが、なかなか具体化しない。
 - ・市内にも公園に健康器具を置くだけでなく、その使い方や健康の相談にのってくれるようなしくみが必要である。
 - ・公園は緑豊かな環境で、多くの市民が健康に取り組む例が見られる。市に頼るのではなく、市民の自由な利用に委ねてはどうか。
- ② 健康相談機能
- ・市民が体調に不安を感じたとき、初期の相談にのってくれるしくみがない。かかりつけ医療との連携が模索されているが、これからは地域包括センターの役割が重要になっていく。

が市当局や病院に認められなかった経験を紹介することがあった。しかし、ボランティア・NPO団体といった志願型組織メンバーからの意見を経て、あきらめずに進めていくといったような前向きの議論が生まれるように変化していった。

(3) 環境テーマから融合テーマへ

第2回会議で初めて環境テーマの活動を行う市民が参加した。最初は、自身の活動を意識して環境をテーマとした発言が多かった。これに対する健康をテーマとする活動市民からの応答は少なかった。しかし、第5回会議では、「歩く」というキーワードから、健康と環境を融合した意見が発言されるようになり、専門家からの指摘、事例の紹介、相乗効果に期待した未来への提案などの議論につながっていった。

(4) 地域課題をベースとした具体議論へ

多くの参加者が必ずしも地元地域の住民ではなかった

ことから、当初、直接的な地元地域課題を知ることはなく、一般論や抽象論を述べる機会が多かった。しかし、地元自治会メンバーからの意見や地域の現状を示すデータなどから、周辺緑地との連携や「歩く」ルート設定のネットワークなど地域課題をベースとした具体議論に展開する例が見られるようになった。

5. まとめ

本研究は、実際に事業として進んでいる吹田操車場跡地まちづくりをきっかけとした「健康・医療まちづくり市民グループ」を結成し、健康と環境に関心のあるメンバーを含む勉強会の中での議論経緯を追うことで、健康と環境のテーマ融合性について分析した。この結果、①当該地域における地縁型組織と健康・医療についての志願型組織が混在していても両者の見解が前向きなものに変化していくこと、②環境テーマメンバーから環境に特化した発言がなされても、議論の中で融合テーマへと展開していく可能性が見いだせること、③必ずしも地域性とは繋がっていなかったメンバーが地域課題をベースにした具体的な議論へと展開することなどを確認した。

今後は、さらに勉強会を続け、より豊かな相乗効果を発揮する議論展開に期待し、実績を上げていくことが重要であると考えている。

謝辞：本研究は、平成27年度関西大学先端科学技術推進機構研究プロジェクト「健康まちづくりのためのソーシャルデザイン」の研究成果の一部であることを付記する。

参考文献

- 1) 厚生労働省：健康意識7に関する調査，2014。
- 2) 吹田市：吹田操車場跡地まちづくり実行計画，2015。
- 3) 吹田市：吹田操車場跡地地区低炭素まちづくり計画，2015。

(2015.8.28 受付)

CONFLUENCE BETWEEN HEALTH AND ENVIRONMENT AS A THEME IN PUBLIC GROUP ACTIVITIES FOR A HEALTHY CITY PROJECT

Keiichi KITAZUME

The purpose of this paper is to analyze confluence between health and environment as a theme of public group activities. The author develops a group which includes citizen around a site project and member of NPO or volunteer group. They discussed on many themes in 5 meetings. The minutes are analyzed from the point of view of confluence. It is observed that participants tend to compromise with other participants not only on his/her field but also on to localization.